

2080年のアントニオ猪木と三島由紀夫

終わらない身体と、完結する身体

2080年秋、東京で開かれた戦後文化研究会議で、アントニオ猪木と三島由紀夫を同じ系譜に置く比較論が提出された。当初、この組み合わせは奇をてらったものと受け止められた。片方はプロレスラーとして大衆の歓声を集め、政治家として国境を越えた。もう片方は小説家として戦後日本を描き、自らの肉体と死を作品の終点に据えたからである。

しかし、身体が多くを情報端末や遠隔アバターに預けるようになった2070年代には、二人はともに「肉体を最終的な証拠とした人物」として読み直されていた。言葉や肩書が疑われても、鍛えられ、傷つき、公衆の前に差し出された身体だけは代替できない。二人はその信念を共有していた。

違いは、身体をどこへ運んだかにあった。

三島の身体は、自己を一つの形式へ閉じるために鍛えられた。文学、演劇、政治的行動、肉体改造は、互いの矛盾を消すのではなく、最後の瞬間に一枚の像として重ねるためのものだった。後年の研究者はこれを「完結する身体」と呼んだ。三島にとって身体は、思想が言葉だけではないことを証明する印章であり、その証明は反復できない一回性によって完成した。

猪木の身体は逆だった。対戦相手の攻撃を受け、異なる競技の規則を引き受け、勝敗の判定が曖昧なままでも観客の前に残り続けた。1976年のモハメド・アリ戦が長く論じられたのも、試合内容の評価だけが理由ではない。猪木の身体は、自分とは異なる力を排除せず、同じ空間に招き入れた。その意味で彼の身体は「終わらない身体」だった。

二人の差は、大衆との関係に最も鮮明に現れた。

三島は大衆社会を観察し、批判し、ときにその熱狂を利用したが、最後まで大衆の側へ溶け込むことはなかった。彼が求めたのは理解よりも目撃だった。観衆が賛同するかどうかより、一つの行為が取り消せない形で記憶されることが優先された。

猪木は理解されないことさえ興行へ変えた。試合への批判、政治活動への疑念、突飛に見えた外交行動も、次の舞台への入口になった。大衆は単なる目撃者ではなく、猪木という物語を毎回作り直す共同制作者だった。三島が観衆の前で自己を完成させたのに対し、猪木は観衆によって自己を未完成のまま更新したのである。

国家との距離も異なっていた。三島が国家を美、歴史、主権、死の問題として捉えたのに対し、猪木は国家を移動、交渉、観客動員の問題として扱った。三島の国家は垂直方向に深く、天皇、伝統、犠牲へと遡った。猪木の国家は水平方向に広く、リング、議会、外国の都市を結んだ。

2080年の評価では、この違いは「閉じた国家主権」と「越境する大衆主権」の対照として整理された。ただし、三島だけを排他的な思想家、猪木だけを開放的な国際人とみなす単純な説明は退けられていた。三島は国際的な文学市場の中で日本という形式を作り、猪木も強い日本人という物語を背負って世界へ出た。二人とも、世界から切り離された日本を考えていたわけではない。

2072年、歴史的人物の人格を対話型映像として再構成する事業が各地の教育施設に導入されると、二人の扱いをめぐる論争が起きた。猪木型の再構成人格は質問に応じて話題を変え、利用者を励ますよう設計できた。一方、三島型の再構成人格は、思想を対話向けに丸めるほど本人の作品世界から遠ざかった。

架空の東都記憶文化院が残した内部記録には、次の一文がある。

「猪木は再現するほど増殖し、三島は再現するほど欠落する。」

この問題は、技術では解決しなかった。再構成事業の費用を負担できる都市部の学校では、二人を仮想空間内で比較する授業が行われたが、地方の図書館や小規模校では、紙の著作と古い試合映像が使われ続けた。結果として、三島は依然として文章から学ばれ、猪木は身体の動きから記憶された。新技術は両者の差を縮めるところか、かえって拡大したのである。

2080年に確立した比較論の結論は簡潔だった。

三島由紀夫は、戦後日本の矛盾を一つの完成された場面に封じ込めようとした。アントニオ猪木は、その矛盾を決着させず、次の試合、次の交渉、次の観客へ持ち越した。

三島の身体は、思想と人生を一致させるために終わった。猪木の身体は、思想と現実が一致しないままでも前へ進むために立ち上がった。

二人が後世に残したのは、強さの異なる定義だった。三島にとっての強さは、自分が選んだ形式から退かないことだった。猪木にとっての強さは、形式を壊されても、別の形式で立ち続けることだった。